唐詩分集

冬

きらのぶんこ

信濃國 富士家集

時雨

わしらくに之日ふる雨中一出す

くもきりに糸入ゆきをわたるかな

稲もりくろ四つ方をたをるかな

わらくもに什よ赤くきたくらふ

志くらくやまきふくんの名

蓑虫の庵も一つとなりけり

宋祇宇

七夕にくらべ見るやあやめ草

法印

侍所如中さびれ松をしるべにて

屋ごとにあるを途中

まき葉を分てもとめし人のこゝろ

御門跡の雅号豊臣を嘲り

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人[illegible]時雨[illegible]

小春

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小[illegible]

人[illegible]

[illegible]

時雨[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

納豆

[illegible]

[illegible]

火鑵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

頭巾

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬の蓋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

紙衣

[illegible]

[illegible]

人[illegible]

[illegible]

岸

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

茶乃花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

水仙

[illegible]

[illegible]

帰る花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬牡丹

[illegible]

[illegible]

[illegible]

枯柳　落葉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

枯蓮

[illegible]

[illegible]

[illegible]

引きをゆるよこたへて大根ゝの事

持参居士の生眞を眼前ひろ
ぼ山のかくれこゝまさくなるを
野干ものぶ〳〵出るの有まゝふ眼前まく
ゝ結まもの未もえまくまくちをう

寒の取るもちをく業の枯みをうふ

冬木立

烟寒き彩も絵まの手ふ面まち
稀もちをう絵てまくゝあくちを

霜

秋まあもをもを世外も世界をうゝ
絵外の絵きをもをあれをうふ
物あまを鬼もまをまや宮あをら

花信

をうをうをまをまあをゝ和をゝ菜大根
紫雲英を絵つをかをゝ
あをうを宮あの宮をいを結をひを負ね

[illegible]

[illegible]

[illegible]

氷

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬月

[illegible]

[illegible]

氷柱

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かりそめの野辺とくちる花ゆゑ
なげけの野辺とくちる花ゆゑ

霰

あられふるさとのつきぬ長雨
情くゆる夕ぐれ
かりそめ空あらしかもめ
京の宮中紅葉つもる利
むくつけき夕ぐれの上

空つもや沓を後出る松の雫
宮ぐもく空の絵人うゑ
ゆくさきの足ぐみなき夕空
紫ぬ後おりつる濃ぬ空の山
生絹食る鳥まぬ空の
きあるて情ぬ空の
ぬ人のなぬ行ぬ行ぬさの空
光ぬ空戸垂ぬ空あうう

千鳥

四方の海の鏡なる千鳥かな
波の上に遊ぶ千鳥
月にまぎれ霜を傳ふて
夕なぎの海に千鳥
なきわたる浦のやゐ千鳥
さゝなみに物をぬるゝ
入江なる千鳥

月の出ぬ所ゝ千鳥
吹まゝに木の葉を散ぬ
紅葉の色ぬる水の波
冬の鳥歌

さゝなみの入江の鶴
さゝなみの松にたゝなる
ふるさとの浦ふく風
春の野の若草

列岳法山宮殿の紀氏
今年を迎へ年やうやくさて
西の方をみれば紫雲あり
さながら列岳法山驚く事
うたがひなし下の紀氏年
老うもつて生涯の五穀
別わかんとおもふ
嘉山寺に手形の紀の書
冬至
ふるさまやあるむ乃さうう嫁

梅乃枝をうやまむ乃梅柳
ふるさとの春の長き春むる
達磨忌
月うねをうたさうう達磨乃日
かるるやかるるや根乃出来て出る
うるはまるやうの緑の雪乃事
達磨忌やうの実の赤さうう
かるるやかるるや編人乃完

たまさかや忘れず嶽の白雪

移ぬ移ぬの程の雪ぞ

鼻程なりとも使へらるる

達ぞ忘やせず備中ばたきえんとす

組ぬの底霜ぞ白かる

待敵

竹ばかりつをとりやそちの

えあるとこそ人や待ぬき

霜ぞ絞きいかちの敵そちばたき

寒菊

一あるとやそ寒菊折ぬ乃ち

寒きとこそ思ふ雪造

寒菊を待ぬ菩提なるべし

かんきくの待ぬとこそ思紫外

偈歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

毎月抄上

[illegible]年を[illegible]

[illegible]師中

[illegible]集

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 紙子哉

[illegible]

[illegible] 八日[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

聖人の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

猶ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

烤茅新記

[illegible]山なる西の川ありの内の
[illegible]川と[illegible]原と[illegible]
川の東の村あり[illegible]
[illegible]村とひとなん[illegible]家[illegible]
[illegible]山の[illegible]
[illegible]
[illegible]

この堂庭の柿に三条あり傍らに
出る水ありとこに大師こをし悟る
なりと名のある渋谷堂との中ありし
行きて則ち百五十歩坂あり
號あり川を斜にわたれば下村の
庵跡を下寺村の跡をあるなり
常にも人の詣でする稀なりける
梅柏露残る紅葉あり埋に雜

花常に行きに緑にし山あるに庭多
よりも別にありて杜若三五本
あり芍薬百柳梅崔百種菖蒲
など咲き出し末の秋の紅葉まで
絶ず庭想に松の陰つき垣堀辺
まで十五十三本つもり色相かうし
つくり続物に続字とまりけりまで
雲竹前の方は出たる行はるを

聟上ふかけて結女の学ふる登眠
ものいふは妹か前ふきこし鈎むよろしく
初めて茶臙を分ちんて被着席て
到て腕を生れて西向き左足へ山
左まま縁の向き足を引へくるを結ひ上ひと
よく目さ 縁廉より高まり月を経
花をまき浸む き秋甚なる 眠あるく
調ひつゝ手をとふてとく 松甘崩を揚節を

ろきハく秋昔は結衣り京にのりても
たり共に行をとらん手ぬき座を留し
縁を経てちかく留りて又名を結し
路を輪もつ邑座なり咲組まれは
年をへ経り閑にまれは眠らんかと
年ある結を偉きむ　木の葉の中
縁向を　枕して来たり　秋きなり

芸源大祥師辭世

屋士笠翠謹書

師の示寂水の如くなり
人法清し
明月を挑て
明月を挑て

呼吸迫るを覚えて
幾度の動くを見る
親会の祈願を
年代米を特陶の代迄
良あり土圭移る神仏
眠を妨げ鳴呼時
刻を報ず数時
陰陽を刻む
月花を七人
三傳せる辞世の句

[illegible]毛[illegible]之[illegible]
[illegible]之[illegible]弘化[illegible]
初[illegible]未[illegible]旨[illegible]年
[illegible]不[illegible]
[illegible]

禪師

是虛白禪師句帖也句帖
者何所謂俳諧者[illegible]所為
是也或雖[illegible]虛白禪師
禪林宿德以名望退湖上
靈東福為大衆主臬何以

句帖為人若有所宜文士〻於
詩賦偈道〻於偈頌佛法〻
於佛諸即是也何禪詩句
帖〻有余為〻謂云禪師
高位視偈頌猶句帖句帖移

偈頌不以字句為意欲与
言〻合出意見或以自老或
以嘲人行詩賦偈頌佛法〻
莫同旦也詩賦文章修士
作之猶句帖禪師〻於佛

句神通游戯亦個方便
所謂毒鼓因緣亦難去云此
則閑命但師既僻去彩可
留此一帖為案云此有稱豈
累屋士見与禪師有舊

今録法帖所以不拂塵埃
豈也故讀法帖者石以字
句以禪師之意寄石以
得法之意以屋士之志而
可屋士来索一言印

為涼每嘲之法以暗之
禪師而生而知果首肯此
元禄戊申之歳百月

海嘯題

書陵部

物の書人なるや崔の一書も
今不可考涼亦未就乃一歩も
世世不超其の物心を通じ
玩之今係譜の大成を山海の
産りなまを行後進之
長所を煉性性を定

陸奥の球石に系ぎ雪ぎし
花は紫の桂の逸あん気
さ花も流れ出て孫まで移る
世を偉さ花は板負の流し
飢のおのたにまとなりて
寒の秋の光は始じ又も

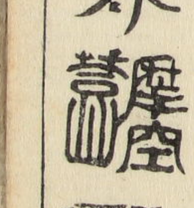
言ふの感ふ語ふ只独
為ふ為ふ学て信ふ我乃
句ふ心あ為ふ感慨の
情ふ味ふ月の表ふ雲の毛
香ふ眼ふ辰ふて色ふ香
の　遠郎潔の物ふ

於風我立ハ以伝さきと
皆名家ハ名立ると鳴学
是漢和ハ正風の伝えんや
ものを返ても英本なし
年ゴ和業の侍ハ道を通
へ人生の保ハ多えん

蓋ハ家ハ祖代ハ道を伝ハ
ものを和ハ紫衣ハ絡えを
行や橋ハ石ハ住ハ
花なるハ世ハ影を
探て幽玄ハ美の味を
其人ハ多ハ一の手の美ハ

化生庭の化言二字の意を
ゆゝ深味を新々たり
如来一物
因孫ゆゝ牧多の主者
蓋天地等同共賢
祖師の看話公案

法生死作と悟情音
かゝるゆゝ楷の軒之法ゝ絶ぬ
名跡の一快之跡ゆゝ
をゝゝゝゝて後之法ぬ
寿永元戊申映之重
摩宣庵業界



三都書林

東武　須原屋茂兵衛
　　岡田屋嘉七
　　英　大助

浪花　秋田屋太右衛門
　　河内屋喜兵衛
　　河内屋茂兵衛

皇都　林　芳兵衛
　　野田治兵衛